

力とでも云うべきなのか)への憧憬をくすぐる快感が、ヤクザ映画の魅力であるといえるだろう。しかもそれが、組織対組織、組織対個人、そして組織との関わりの中での個人対個人という、私たちの日常の葛藤と同じ次元でのせめぎ合いの中から生まれてくる暴力だ、というのだから、これは相当に魅力的なものになってしまっただけだ。ヤクザ映画の第二の魅力は、この組織と個人との関係の描写にある。この点では、前期美学派路線と後期実録派路線では、明らかに重点の置き方が異なっているのだが、ここでは東映ヤクザ映画の下手くそな総括をすることが目的ではないので、詳説することは省略しておく。

ともあれ、「仁義なき戦い」シリーズが一定の観客動員力を持つに至ったのは、映画としてのテクニク(カメラ、ナレーション、音楽も含めて)が卓抜だったからというだけではなく、何よりも組織についての視点が相対的リアリティを持っていたことによるだろう。組長が、あるいは各組員が自己の所属する組織をそれぞれと違った位相で抱えているのか、自己保身と組織性のテンビンの目盛をどう読みたがっているのかを、このシリーズはドシニカルに、かつリアルに描写しえたヤクザ映画はあるまい。

しかし、である。第八作目においてついにこの路線も破綻したかに見える。リアリティ

が、現実へのインパクトが、全然迫力のないものになってしまっていると思えないのだ。深作欣二の作品らしいところは、唯一ラストシーンのみで、その他の部分は完全なマンネリズムに陥っているのしか見ることができないのだ。

ラストシーンはこうである。関西最大の暴力団組長を、自分の属していた組長の仇として襲って失敗し負傷して警察の監視下入院していた菅原文太が、そこを脱出して病気で寝込んでいる相手の組長を再度襲撃して撃ち果してバクられる。護送の車に乗せられようとしている文太のまわりには相手方の組員ばかりでなく、文太の親分が属していた上部組織の親分衆たち、当の関西系暴力団に対抗しようとして逆に先制攻撃を食って一挙に保身のため関西系暴力団と手打ちをして平穏に事をのりきろうと画策し、文太を排除した親分衆たちの当惑した顔も見える。その時、警戒する警官たちを出しぬいてバトカーの屋根に飛びのり、文太を拳銃で射撃したテンビラがいる。彼は即座に警官に取り押えられるのだが、「ワイがやったんやで」と男を売り込むことに余念がなく、周囲の誰彼も安堵したように「ようやった」とテンビラをたたえる。

この作品は、このシーンがなかったら、前期美学派の路線かまたは暴力至上主義の路線への回帰として見えない。文太にせよ和田浩

二にせよ、数々の親分衆やその他の子分衆たちにせよ、組織の中での人間としての揺れが少ないし、揺れてもすぐに揺れるとそれ以前に判ってしまう。特に重要である文太、和田、そして各組織は、最初から成長を終えたもの、動かないものとして描かれている。高倉健、鶴田浩二、藤純子などの描き方と同一になっているのだ。このブレ、人間らしさを描くところにこのシリーズの面白さがあったのだと気づいたのは、この作品がそれを放棄したために遅ればせながら気づいたことなのだが、つくづく東映はやはりヤクザ映画から撤退して、「実録日本共産党」でも撮ればよからうという気がしたのも事実である。人間と組織を描いてあれほど面白く観客を楽しませた東映II深作ならば、日共は恰好の素材であると思われし、何よりももう、ヤクザ映画は、暴力の側か生活の側へあと一歩踏みこまない限り面白くは作れないだろうと思われる。深作はパターン化したヤクザ美学派路線を、自己保身の醜態さを描くことによってのりこえはしたものの、そうすることによって描きうるのは現実感であってロマンではなかったのだから、その手法を繰り返すことは美的完成に近づくことではなく、単純なマンネリズムに陥ることになる。これを現在の視点、素材、手法で突破することは余り期待できそうもないと思うのは早計だろうか。(六六頁(へつづく))

△プロ独神話の崩壊1▽

新しい革命観の構想・問題提起として

奥沢邦成

はじめに

今年の一月にスペイン共産党は、党綱領として「プロレタリアートの独裁」を放棄する旨を最終的に宣言した。さらに翌二月には、フランス共産党が二回大会で同様にプロ独を放棄し、すでに独自の政治路線を提唱してきたイタリア共産党とともに、プロ独に象徴されたロシア・中国・東欧型の革命とは異なる西欧型共産主義の政治路線を公然と歩み始めることになった。

日本の場合をも含めて、七〇年代に入って顕著となった先進資本主義諸国における各国共産党のこのような動向は、決して新しいものではない。それはすでに内部的に進行していた事態の公然化もしくは確認にすぎないといえる。その端緒は、スターリン批判(一九五六年)に求められるし、六〇年代には、モスクワと密接な関係を保持しつつづけていたフランス共産党の機関紙「コミニテ」に、「単一政党の存在が社会主義への必要条件であるとする考えは放棄している」(一九六四年)という一節が見られるという。それはまた、六〇年代に進行した資本主義諸国での高度経済成長がもたらした政治と社会の構造的変

化が、各国共産党の路線変更を確たるものにし、モスクワのドグマを放棄する途を選択せしめたとも言えるだろう。従って、プロ独の放棄は、各国の共産党にとっては以上の諸変化の確認であり、同時に独自の共産主義とその政治路線の出発を意味している。(しかし今のところ、単なる路線変更と綱領の手直しでしかなく、社会主義および共産主義の核となる思想上の問題は何一つ提出されていない。)

次に、プロ独放棄と、新しい政治路線の提唱などの動きをおおまかに追ったうえで、そこに現われてきた問題を抽出していくことにしたい。

△日本▽ 一九七一年一月にプロレタリアートの「独裁」という訳語が不適当であるという意見が宮本顕治によって提起された。七三年の二月にはデイクタツラ(独裁)に対し、執政あるいは執権という訳語が適切であるとの見解が出され、十一月の十二回大会で「プロレタリアートの執権」に改められた。今年三月には「プロレタリアートの執権」という用語自体を党綱領に残すことが必要か否かを検討して

いと発言、削除は時間の問題にすぎないだろう。この間、共産党は革新統一戦線を基盤にした民主連合政府の構想を打ち出している。

△フランス▽ 今年一月、マルシェ書記長が「今日、独裁という言葉は、われわれの望むものには対応しない。プロレタリアートという言葉も適当でない」と発言、つづいて二月の二回大会でプロ独の放棄を宣言し、幅広い人民連合—フランス国民連合を提唱した。後者は、七二年の左翼連合構想によって提出されたところの、社会主義実現にあたって複数政党制を採用するという路線であり、社会党・急進社会党左派との間に共同政府綱領が成立している。

△イタリア▽ 第二次大戦後の早い時期から独自の路線を展開してきたイタリア共産党は、プロ独の放棄を公式に宣言したことはない。議会民主主義、複数政党制、投票結果による民主的な政権交代を主張し、「歴史的和解」を呼びかけている。それは、現在第一党のキリスト教民主党、第二党の共産党、第三党の社会党による三党連立政権の構想である。この背景には、六〇年代に入って推し進められた共産党締め出しを狙ったキリスト教民主党と社会党による中道左派連立路線への批判、他方共産党自らも左翼勢力だけの連立構想を出さずに、キリスト教民主党とも和解するという構想で、その実現はもはや時間の問題であると考えられている。

△スペイン▽ スターリン批判以降、自主路線を追求してきたが、合法下の旧フランコ政権との厳しい状況（カルロス新政権による合法化の実現という見通しもついていない状態にある）のもとに、地下組織「労働者評議会」を基盤にした活動を進めてきた。今年一月にプロ独の放棄を宣言、また七五年十一月にはイタリア共産党との間に共同

行動宣言を採択した。共同行動宣言は、イタリアとフランス共産党との間でも結ばれ、複数政党制、民主的な政権交代の可能性を基調に「社会主義は民主主義を深めていくことによって実現される」と宣言している。

△ポルトガル▽ ソ連主導型の路線を一貫して踏襲していたが、一九七四年の「リスボンの春」（軍事クーデター後の新政府へ共産党から二名入閣）以降、その失敗の経験に立ってソ連寄り路線を改めている。七四年十月には、党大会でクニャル書記長は「独裁の用語は党政政策を一般に理解させるに不当である」と述べている。

以上に記述された各国共産党の政治路線の転換は、人間の解放と自由社会の建設という社会主義の理念に對置されたとき、一体何を意味しているのか、また、何を意味し得るのだろうか。六〇年代における左翼運動の諸体験は、共産党をはじめとした旧左翼勢力が社会の変革を目指したさまざまな運動に對し、その根本的な理念とエネルギーの源であり発露でもある率先性、その思考と行動のもっとも貴重な質と部分を圧殺するものとして機能し、立ち現われたことをわれわれに知悉せしめたのである。

問題は、二つの次元で明確に捉えられなければならないだろう。一つは、現代社会をどのように変革していくのかという社会革命の内実に見点を定めつつその課題をより鮮明にしておくこと、その立場からプロ独放棄という事態が内包する現代革命の問題点を見通すことである。他の一つは、前者の視点から、政治もしくは政策レベルの政権獲得にむけた路線問題に對する、思想そして現状の分析と実践的な立場

からなされる批判の展開である。それは、プロ独放棄がきわめて具体的直接的に提起した、武力を不可避とする政権の奪取と独裁制の図式とは全く異なる高度資本主義国における共産党の在り方、政権獲得にむけて提示された複数政党制と民主的な政権交代という考え方が現実に対し何をもたらすのか、という疑問でもある。例えば、政党分野に占めていた最左翼としての共産党の立場は名実ともにその自明さを失うであろう。それ以上に、社会主義政党として立脚すべき思想的資質を、大衆政党としての票数に置換していくであろう避け得ない議会主義への傾斜、あるいは提唱された連合政権構想と個別政策の検討と批判、思想的検証、より根本的にはそこで考えられる社会主義とはどんなものか、引き出される問題は数限りないであろう。（これらの点に関しては、ここでは取りあげない。）

本稿で主に考察したいのは、現代社会の変革は政治によってではなく社会そのものの根底的な変革と創造とによってしか達成でき得ないことを基本認識として、プロ独に象徴されていた革命観の検討と、新しい革命を構想していくためのいくつかの視点である。

プロ独の神話は崩壊し、死滅した。しかし問題として意識的に把握されるべき一つは、プロ独神話の崩壊はアナキストにとって、実は何一つその思想的解決を意味していないこと、むしろプロ独の思想的廃絶を自らの手で成し得なかったことによって、より一層その意味するところを深く受け止めなければならないということである。同じ根はまた姿を変えて立ち現われるであろうし、課題は少しも軽減されていない。この事態が変化を遂げた現状の単なる追認である限り、社会の実際も、人々の思想も何一つ変化してはいないのだから。

こうした問題意識に立って、まずプロ独がどのような思想内容をもって成立していたのかをマルクスおよびレーニンを辿って素描し、次いで同じ問題に對してアナキストがどのように考え答えていたのかを、バクーニンおよびロシア革命期のアナキストとアナルコ・サンジカリストの発言のなかで考察したい。さらに両者の比較を通じて、その差違と個々の主張が、現代とどう関わりうるのか、現代の革命の核となる思想上の質にどう寄与し得るかを探りつつ、新たに構想される革命への指針を捉えたいと思う。

一 プロ独の形成とそれを構成する基本概念

プロレタリアートの独裁は、一般に、プロレタリア革命の勝利後に、旧搾取階級たるブルジョアジーの反革命策動を阻止抑圧して革命の勝利を保持し、資本主義制度の廃棄を徹底化する一方、社会主義制度の建設を任務とする政治形態である。それはまた、社会主義社会の成立の結果死滅するであろう国家権力、自由社会の成立に至る短期ではあるが不可欠な過渡期の政治形態であると規定され、考えられている。ここには基本的ないくつかの考え方が横たわっている。

I、プロレタリア革命の勝利は、反革命勢力と旧体制の残滓から革命の勝利を保持するためにプロレタリアによる階級独裁によってそれらを抑圧し取り除かなくてはならない。

II、旧体制から社会主義社会に至る過渡期における社会の建設は、プロ独体制のもとに指導・実践される。

III、独裁を実現するためには中央集権制をとらなければならない、そのためには国家ならびに国家権力を必要とする。

IV、国家および国家権力は、社会主義社会の建設とともに死滅する。
(I) III項によって、国家権力の奪取が革命の同義語となり、革命に至る過程およびプロ独における党(前衛)の役割が確定、強調される。党、前衛の問題はここでは触れない。

まず、プロ独の形成過程をふり返ってみると、プロ独のモデルをマルクスとエンゲルスはバリ・コミューンに見出している。マルクスは次のように考えた。

コミューンの真の秘密はこうであった。すなわち、コミューンは本来労働者階級の政府であり、占有階級に対する生産階級の闘争の所産であり、そのもとに労働の経済的解放が遂行されること、最後に発見された政治形態であった。

マルクス「フランスの内乱」

そして、レーニンはこの考えをロシア革命の実践において展開させる。マルクス主義は、一般に革命期における、そして特に資本主義から社会主義への過渡期における国家ならびに国家権力の必要を肯定することによって、無政府主義と区別される。マルクス主義は、右の時期には、普通の、議会主義的ブルジョア的共和国の如きではなくて、バリ・コミューン型の国家が必要であると考える……。

レーニン「わが革命におけるプロレタリアートの任務」
プロレタリアートの独裁は、旧社会のさまざまな勢力や伝統に對抗する頑強な闘争、流血もしくは無血の、暴力によったもしくは平和的な、軍事的もしくは経済的な、教育上もしくは行政上の闘争である。数百万千万の人々の習慣の力は、最も恐るべき力である。闘争でできたえられた鉄の党がなければ、所与の階級内の誠実

なひとたち全ての信頼を受けている党がなければ、大衆の気分を追跡し、影響を及ぼす党がなければ、この闘争を首尾よく遂行することは不可能である。

レーニン「共産主義における左翼小児病」
さらにレーニンは、次の二点においてプロ独を救い出そうとした。すなわち、

独裁は、他の諸階級に対してこの独裁を実現している階級にとっては、必ずしも民主主義の廃棄を意味するものではない。

レーニン「プロ独と背教者カウツキー」
独裁は単なる搾取者に対する強制力ではなく、また強制力を主としていのでさえない。この革命的強制力の経済的基礎、その生命力と成功の保障であるのは、プロレタリアートが、資本主義に比べて一層高度の型の、社会的労働組織を代表し、実現しているということである。ここにこそ核心がある。ここにこそ力の源泉があり、共産主義の不可避な、完全な勝利の保障がある。

最後に示された二点、すなわち階層独裁である限り独裁階級としての大多数のプロレタリアート自身にとっては抑圧を意味せず、ましては民主主義の放棄ではあり得ないこと、また、資本主義社会に比べてはるかに高度な社会的労働組織の成立によって民主主義は徹底され、共産主義の実現による経済的・社会的な社会基盤によって体制は保障されるという主張が夢想に終わったことをわれわれは知っている。階級としての独裁制が、現実には、プロレタリア階級がソヴェトによって、ソヴェトが党によって、党は中央委員会によって、中央委は政治局も

しくは個人によって代行されるというピラミッド式の位階制と膨大な官僚制を生み出し、プロレタリア階級に対する全体的な抑圧機構を形成した事実は、階級独裁という概念が虚構にすぎなかったことを歴史的に証明することとなった。また同様に、社会主義社会の基礎となる高度の労働組織の創出も、そうした体制のもとで何ら新しい寄与と展開を示していないことも指摘されねばならない。

従って、ここで確認されるべきプロ独の基本的な要素は、既存権力の打倒後に旧体制の反動的要素を抑圧し除却するための独裁であり、独裁を保障するのは中央集権化された国家機構・国家権力であるとする考えであり、こうした独裁制が未来社会の建設を主導するであろうことが期待されていた。これらの組み合わせが、不幸にも、既存の「国家権力の奪取」に定式化され、革命と同義とされ、社会主義革命の真の意味を深めることなく、政治権力の移行としての上すべりの政治革命に終息することとなった。その意味では、本来プロ独が有していた基本概念のいずれにおいても、また社会主義革命を潜称したその政治革命としての限界においても、共産党にとってはその政治的有効性の故に、われわれにとってはその反社会革命性の故に、プロ独放棄は自然な成り行きであった。

二 連合主義と独裁

プロ独に関するアナキストの見解を次に検討するが、残念ながらこの分野における理論的な成果はきわめて少なく、皆無であるといってもいいだろう。そのなかから、まずバクーニンのアルベル・リシャール宛の一八七〇年四月一日付の手紙で述べられた革命観(ネットラ

ウ「無政府主義思想史」所収)、そしてロシア革命の渦中で繰りひろげられたアナキストとアナルコ・サンジカリストの発言、およびそこから引き起こされた論争を検討してみることになしたい。

バクーニンの手紙は、中央集権制と革命的國家に賛意を表するリシャルドに対して、そのいずれにも反対するバクーニンの考えと彼の革命観を展開している。

我々の確信するところでは、バリは全く否定的な、即ち充分に革命的な創意を得なければならぬ。それは、破壊と清算の革命ではあるが、組織のそれではない。もしバリが起ち、勝利を得た場合、それは政治的・法律的・財政的・行政的國家の完全なる清算、公私の破産、あらゆる國家の権力、事業、機能および暴力、あらゆる文書、公私の記録の焼却あるいは祝火を宣言する義務と權利とを持つのだ。——バリは事がうまく運ぶ。連合せる労働者が労働要具、各種の資本、建造物を占有し、武装し、市街 市区に組織されたままであるならば、必ずや革命的組織化を防ぐであろう。バリはすべての市区の革命的連合、即ちコミューン連合を形成するだろう。

政治的革命家、即ち公然たる革命の徒は、革命の必ず最初の勝利に情熱の鎮静を感じ、革命の途上建設された権力の下に秩序、信頼、服従を感じ——かくて彼らは國家を再び建設する。我々はそれに反してあらゆる情熱を胸中に蔵しつつ、鼓舞し、解放しなくてはならぬ。我々はアナルヒーを実現し、民衆の進撃の中にあつて先導者となり、民衆を権力によってではなく、あらゆる連合者の集会的独裁により導かねばならぬ——それは裝飾も称号も公

権力もない独裁であり、それが強大になればなる程、益々権力としての外貌は失なわれる。これは我々が許し得る唯一の独裁である。しかし事務を処理するためには独裁が存在しなければならぬ。そのため人々には独裁を準備し予め結成しなければならぬ。何となれば独裁はそれ自身では、討議、理論的説明、討論、国民会議によっても成立しえないからである。

さて、この手紙がバリ・コミューンの一年前に書かれたことに、留意しておこう。バクーニンは、旧体制の徹底的破壊を清算として語り、反革命分子とその活動を抑圧し、民衆を先導するための「独裁」を語る。その力点は後者に注がれているが、同時にその独裁が「連合者の集合的独裁」であると主張する。このことの意味は、個々の運動の渦とダイナミズムのなかに民衆をまき込むこと（アナキストは運動の先導者、率先者、提起者として位置づけられるが）、それらの諸運動体の連合の過程が全体として、集合的な結果として発揮し表示する、不可視の集合的勢力による独裁（客観的な作用としての強制力）であると理解される。この点に関しては、引用部分に先立つ一節が次のように補足するであろう。すなわち「幸福を革命的無政府において認める。それは一般に、見えざる集団的勢力によって導かれ得るが、その唯一の独裁は、私は許容する。何故ならば、その独裁のみが公明正大さおよび革命運動の充滿せる精力と結合し得るからである」と述べている。これらの点はとくに、革命の組織化、権力の組織化、中央集権と革命国家の建設に一貫して反対し続けたバクーニンの思想によって一層鮮明に浮き彫りにされるだろう。民衆の蜂起と既成権力の破壊は完成なる清算にまで進められ、革命単位たる市区（コミューン）にその全て

の資本・用具・労働者を組織したままに、革命の組織化—中央集権化を防ぎつつ、連合を形成することが主張される、そして、このコミューン連合の社会体制のもとに社会主義社会の建設が進められる。（「事務を処理するための独裁：」は、情報の集中体制もしくはネット・ワークとして理解される問題であろう。）

ロシア革命の渦中で、ロシアのアナキストは、プロ独というボルシェヴィズムの主張を批判し拒否したが、反面では急速に進行しつつある革命の現実と直面し、それへの回答を迫られていた。プロ独に対する批判の多くは、原則論的立場からなされたもので、必ずしも十分に現実を踏えた理論的展開をみせてはいない。それが現実への適切な提起、展開内容の実質というより、原則論に依拠し形式に捉われていた傾向は否めない。

一九二〇年九月に開催されたウクライナの組織（ナバート）の第三回大会から、ロシア・アナキストの当時の思想的模索を探ってみることにしたい。大会は、参加者の一人が「アナキズムの基本的な諸思想は、革命の諸教訓を汲んで、いくらかの訂正を受け入れるのか？」という問題提起と、回答要求が出されたこと報告している。「過渡期」と「労働の独裁」という問題に、それらは集約されるもので、大会の決議は次のように回答をまとめた。要点を抜粋すると、

2、アナキストは、絶対自由主義的な傾向を帯びている革命の初期と、アナキーの最終的な目標、アナキスト・コミューンとの間に、古い隷属の名残りが消えてゆき、自由な提携の新しい形が、効果的に練り上げられる、そうした期間が挿入されねばならない、

ということを否定する。……「過渡期」という表現は……歴史的マルクス主義精神が滲み込んでいて、そのためアナキストにとってそれは受け入れられないものになった。

3、われわれはまた、その採用を勝ち取るようとしている幾人かの同志たちの努力にもかかわらず、「労働の独裁」という表現を用いることを拒否する。この「労働の独裁」は、散々に破産したままとなっている「プロレタリア独裁」以外のものではない。結局、それは宿命的に、プロレタリアートの一派の、特に一党の官僚たちの、幾人かの隊長たちの、プロレタリアート大衆に対する独裁に到達する。……独裁の思想のアナキストの綱領への導入は、諸精神における許しがたい混乱に達するであろう。

過渡期とプロ独に対するアナキストの批判は、確かにその後の歴史がその正当性を証明した。しかし、ここに見られる思想的内容はいずれも実際の行動の指針としては十分ではないだろう。他方、過渡期および労働の独裁というナバートの決議において拒否された主張を唱えたアナルコ・サンジカリストの考えを参考記しておこう。A・シヤピロは一九一八年八月の全ロシア・アナルコ・サンジカリスト連合大会の決議に関連して次のように述べている。

社会革命は経済革命である。資本主義の絶滅および労働者による全産業と経済生活の管理である。……この立場から社会革命の最も自然で最も適した担い手は、革命的な労働者組織、組合である。これらの参加なしに社会革命は成功しえない。

この立場でせいぜい言うことは、プロレタリアート内の革命的労働者組織の独裁である。革命的諸政党が革命的プロレタリ

アート大衆のなかに深く押し込まれば押し込まれるほど、過渡期はそれだけ短くなるであろう。

だが、こうした主張が問題の核心を十分に捉えていないことも疑えないのである。アナキストは、経験的に証明されたアナキストのみの組織の不成功と否定的結果を踏まえ、ロシア革命の渦中のあらゆる革命組織に積極的に参加した。ナバートの決議は、「われわれはしばらくの間、さまざまな形で『ソヴェト権力』とともに行動した。……われわれは、労働者農民大衆に、革命を強化するよう促した。われわれは新しい支配者たちに忠告を与え、彼らに同志的な批判を下した。しかし、革命から生まれたソヴェト権力が、三年の間に支配の強力な機構となった時、革命は圧殺された」と述べた。アナキストはそして、自らが予想した如くの運命に遭遇し、革命の表面から消し去られていく。

問題は、疑いもなく、革命の社会的成果を保持し、他に譲渡することなく自らの内に蓄積し得る社会集団（コミューン）の建設と、その連合にある。

ロシア・アナキストたちによって提起された諸問題は、一九二〇年代に、主要には過渡期をめぐる理論的課題としてアナキストの間で取りあげられた。しかし結果的には原則論に終始したに止まり、革命期における主要かつ決定的な諸条件・与件を視野に入れた理論的探求は本格的に取り組まれず、今日に至っていると考えられる。ただ、一九一八年に「われわれは、われわれが考えたように豊かではない。……問題は破壊しながら建設するのではなく、建設しながら破壊することにある」と述べたクロボトキンの言葉に、推測の域を出ないが、ア

ナキズム理論の不十分さをロシア革命の推移とともに思い知らされた彼の問題意識を垣間見ることができるようになる。

最後に、レーニンによって定式化されたプロ独に対する他のマルクス主義者の批判に触れておこう。正統派マルクス主義をもって任ずるカウツキーや、ローザ・ルクセンブルグなどの批判が展開されたわけであるが、ここでは、レーニンによって「背教者カウツキー」として論破されたと思われてきたカール・カウツキーの思想を取りあげよう（J・H・カウツキー「プロ独とは何か」による）。最初に、カウツキーの社会主義理解を記しておこうと思う。ここであえてカウツキーを引用するのは、一つにはロシア・マルクス主義としてのレーニン主義が社会主義思想を風靡する以前の、社会主義思想に対するより広い視野を得たいと考えてのことであり、社会主義革命そのものを再考する際の素材として欠かせないと判断したからである。

社会主義とは、社会による生産の組織化のことである。そのためには全人民が経済的に自己統治する必要がある。人口のごく一部の階層による独裁あるいは官僚が生産を国家的に組織化したとしても、それは社会主義ではない。社会主義とは、広汎な大衆が組織化の経験をもつことを要求し、経済的にも、政治的にも自由な多くの組織が存在することを前提とし、組織が完全に自由であることを必要とする。

カール・カウツキー「政権への道」
社会主義をこのように考えるカウツキーにとって、プロ独は「政治の一形態でなく、数において優勢をはこぶプロレタリアートが政権を

獲得し、民主的な政府を確立した場合、必然的に生じる「条件」であると考えられている。プロ独を決定的で固定化した政治の一形態とみなさずに、結果的に生じた一条件であると考えれば、一条件にとどめる革命主体の広汎な存在の予測、より具体的にはカウツキーが労働者階級の「成熟」を社会主義の必要条件として常に強調したという志向が作用している。

成熟という点に関連して、人民もしくは民衆観が、例えばアナキストにみる楽観的ともいえるその内在的自発性に対する全面的信頼、ローザが提起した自然発生性の問題、そしてレーニンの外部注入論といった特徴的な対応があったこともつけ加えておこう。しかし、カウツキーが社会主義の必要条件とした労働者階級の成熟という問題を、われわれは二つの疑問とともに考察する必要がある。一つは労働者大衆の成熟は如何なる社会体制と方途のもとに成されるのか、そして、二点目は国家権力の存在は労働者階級の成熟と両立するものではない、という点である。ここにおいて、われわれはカウツキーの社会主義的理想の正しさにもかかわらず、マルクス主義者としての限界を見るのである。問題は、つまるところ国家および国家権力に対するマルクス主義とアナキズムの和解し得ない対立に帰着する。

三 国家の問題と連合主義

既存権力の破壊につづく、革命の成果の保持と建設をどのような社会形態のもとに進めていくのかという課題に対して、レーニンはプロ独を提出した。同じ課題に対して示されたバクーニンの集合的独裁とコミューン連合の考え、苦闘したロシア・アナキストの諸主張、最後

にカウツキーの思想を取りあげてきた。では、プロ独をめぐる言及された諸問題を、今日、われわれはどのように理解し捉えかえしていくべきなのだろうか。次にそのいくつかの要点を整理してみたい。

第一に、旧体制とその権力の打倒とその後に残存する反革命分子の抑圧、他方社会に根深く定着した慣行や制度・習慣に対する絶えざる闘争と、労働の社会的組織の形成と未来社会の建設への絶やまぬ努力という二つのレベルでの課題が、プロ独において統一的に果されるといふ考えに対し、一つの疑問が提示される。すなわち前者の政治レベルの問題と、後者の社会レベルの問題を明確に峻別すること、各々は相異なる解決と方法を要求するものであることを理解する必要がある。政治は社会をおおいつくすことができない。できうると考えることによって、マルクスとレーニンのプロ独思想は成立したが、同時にその破綻は論理的な当然の帰結であったことを確認すべきであろう。

第二に、国家は政治の最高度に発達した組織形態であることから、国家と国家権力の「社会」主義社会への導入は自らの破綻を意味する。マルクスはバリ・コミューンを労働者の政府、「労働の経済的解放が遂行される」ことの最後に発見された政治形態」と定式化し、レーニンはその見解をロシア革命の実践においてプロ独理論として完成させた。それは不幸にして国家（権力）をもつて、しかも国家権力の最も強化された独裁によって革命が遂行されるとする権力形成に対するきわめてテクニカルな認識に基づいている。国家をやがて死滅するものとして安易に処理し、国家権力の内在の本質を見誤った。革命における国家の問題についてマルクス主義と対決したアナキストは、国家の廃絶、国家の即時廃止を、政治革命に対する社会革命を主張した。

国家に対してコミューン連合を、前衛の指導に対して民衆自身による革命遂行を、指導に対して率先を、権力に対して自主性を主張した。廃止されるべきは政治であり、国家であり、プロ独であり、追求されるべきは社会の変革であり、コミューンであり、コミューンの連合である。

第三に、プロ独は国家権力を積極的に肯定するが故に、権力の奪取をもって社会主義革命の第一歩と定式化しえた。そのため革命をきわめて政治的なもの、政治レベルの問題として固定させてきた。この点において、例えばプロ独放棄を宣言し、複数政党制と政権の平和的交代を目指す今日の各国共産党の路線は、プロ独と同一の発想基盤に立っていること、放棄はテーゼの表現形式の有効性が失なわれたためであって、その変身は内面に及ぶものではない。われわれは、革命をこのような隘路に追いつむ考え方は無縁である。

第四に、政治権力の奪取が革命の第一歩であるといわれれば考えないが、これは以上の考察によって得た一つの結論である。同時に、この結論は既存権力と体制をそれ自身として、そのものとして破壊することが同じく革命の第一歩であるという意見への賛意を拒まないだろうか。これが新たに提示された問題の一つである。

第五に、国家を即時廃止し、コミューンの形成とコミューン連合社会の建設を主張する連合主義は、どのように革命を実現し得るのだろうか。バクーニンは、旧体制の完全な清算と、集合的独裁を許さしうる唯一の独裁として主張する。その実体はあからさまな権力ではなく、革命の阻害物に対する対抗的内実の形成（コミューンとその連合の充実）によって帰結されるものである。それが乏しければ乏しいは

と直接的な権力の形をとるかも知れないが、確たる内容を備え強大になるに従い、形成された存在が阻害物を無化せしめる。それ故に、この考えはコミュニケーションの即時的形成とその連合社会の構想と不即不離である。コミュニケーションは構成員の自発性と合意に基づく、解放された高度な労働および生活の集団組織の実現を目的とする。こうしたコミュニケーションの連合体として成立する社会形態、その原理としての連合主義をアナキストは主張してきた。もちろん、もっと明確にされねばならない部分は多い。

第六に、連合主義には明確化しなければならない部分が多々ある。そのきわめて重要な点は、国家の即時廃止である。方法論として国家政治権力的方法を自ら採用しないという意味ではともかく、現に存在する国家（権力）に対する対応として考えるならば、国家の即時廃止はどのように具現されるべきなのだろう。すでに四項で述べた国家や権力をそのものとして破壊することを拒否するなら、この問題をどのように理解し考察していくべきかは一層重要な問題となる。

第七に、では連合主義は何故、ロシア革命において力を得、実践されなかったのか。ボルシェヴィズムへの理論的敗北であろうか。確かに、アナキストは連合主義を理論的に深化し得なかったし、その後においても抽象的な原則論から、足を地に着け得る理論的内容を提示してはいない。しかし、レーニン主義はその理論的な説得性をロシア革命とその後社会主義運動において勝ち得たが、その理論の正当性はロシア革命のその後進行的に現実によって失なわれている。連合主義が何故力を得なかったのかに対する答を、労働者の成熟度の問題に見出し得るのではないか。われわれは、われわれが考えているほどに

自らの生物学的かつ社会的存在から自由でないという認識は、思想とその実現という問題についてことさらに言い得よう。

第八として、前節で触れた、国家権力の有効性と労働者階級の成熟とは両立するものではないという思考の検討が必要とされよう。それは人間の集団・社会の運営や維持、組織内容と形態における成熟度を一つのスケールとして設定することである。政治権力が有効であるのは、それに対応した社会形態においてであり、少なくともわれわれが目指す社会主義社会においては政治権力が社会において有効な機能性をもち得ないと、われわれは考える。社会主義社会の社会原理はいまだ発見されていないより高度の労働組織、生活集団組織に基づくもので、われわれはそれをコミュニケーションとコミュニケーション連合として仮定し、提示し、その実現を追求する。では移行はどのようにして成されるのか。それは政治権力の社会的有効分野を限定し、制限し、かこい込む社会的勢力、労働大衆の成熟とその活動に依存する。アナキストはその領域において率先的に模索し、試行し、提示し、検討する絶えざるサイクルと流れを形造ることに寄与し得る。

連合主義は、権力奪取とは切り離された地平に立っている。権力奪取はすでに述べたように、連合主義にとって革命の前提でも、その最初の一步でもない。と同時に、連合主義の着手は、破壊ではなく創造に始まることも再度銘記したい。

四 革命の構想にむけて

生産の発達のみではなく、労働者階級の成熟もまた、社会主義社会の必要条件であるとする思想は、今日、十分に再考される必要がある。

とくに社会主義思想との関わりにおいて、われわれは、自らが思っているほどに自己（および社会的存在として）の存在から自由ではないと省察する態度に通じる。そしてまた、社会を構成する多数者としての労働者階級の成熟は、同時に社会そのもの、社会形態そのものの成熟という考えと切り離すことはできない。これらの認識が、少なくともこれらの認識を踏えることが、社会主義の、革命の、変革のための運動の、固有の与件であり、われわれが依って立つ現場の基盤である。従って、社会が産業化を達成すること、産業化がもたらした中産階級の形成過程、そして今日の、高度に産業化された資本主義諸国の諸相をどのように把握するかは、革命の問題を考察するためには欠かせない。革命の現在の在り様は、むしろその分析と認識のうえに初めて構築し得るのである。われわれは次のことを知る必要があるのではないだろうか。あまりにも過度の観念志向の優先もしくは思想の絶対化が、実は、われわれ自身を救い難く貧困にしていたのではないかと、という反省である。ロシア革命を含めて、中国やその他の革命の現実を、社会主義思想の理論的、論理的なレベルにおいてのみ捉え、理解し、判断してはいなかったらうか。しかも、その論議に拘泥し眼を奪われていたあまり、社会主義思想のもっとも根源的で貴重な質を見失い、同時に日々の社会生活そのものの場とそこでの変化を見逃してはいなかったか、という懸念をぼくは払拭できない。

これまでのさまざまな革命は、無名の数多くの民衆のエネルギーによって惹き起こされ、民衆は社会と支配階級を揺り動かし、革命を推し進める原動力であった。そうした民衆のエネルギーを革命家は政治的に操作し刈り取ることに依り、その役割を任せてきた。それ故に、

民衆とそのエネルギーは何時れ、操作可能な枠組みのなかに閉じ込められる。しかし、社会主義の真の目的は、民衆一人ひとりの解放であって、民衆から発したエネルギーは政治にとどまってはならず、民衆自身のなかに完結しなければならぬ。社会主義社会は、民衆一人ひとりが自己のあらゆる可能性のために、その力が最大限に発揮され、かつ自己完結し得る社会連関によって形式される。それは自ずから、民衆のエネルギーはそれ自体として組織化される必要を強調する。それは、民衆に、あるいは一人ひとりに近いレベルであればある程、われわれの目的とするものに近づく。われわれは、その単位をコミュニケーションと名づけ、コミュニケーションによる社会形態を想定しているのである。しかし、この概念は未だ不十分であり、不明確であり、力を得るものとなっていない。

この基本的な志向のもとに、コミュニケーション社会を目指して現実の社会を変革していくこと、これがわれわれにとって革命が意味するものである。そして、革命が直面する現代の多様な社会制度と形態を、どのような分析方法によって把握するかが、避けられない設問としてある。ここで採用されるべきは、産業化（産業化によって主導された諸変化を含めた意味での）の軸である。かつて愛好された信条的なドグマは再生されることによって従属変数たり得るし、その占める比重はより重要なものとなる。産業化の軸は、a、高度に産業化を達成した社会（西欧・アメリカ・日本など）、b、産業化を強力に推進している社会（ソ連・中国・東欧など）、c、産業化の前段階もしくは端緒にある社会、といった今日では旧聞に属するロストウの理論を想起させるものである。この区分は、政治・経済・社会体制の面から、a、

議会民主主義と資本主義、b、一党独裁の社会主義制度と計画経済、c、旧体制からの十分な離脱が完了せず新しい体制が確定し得ていない社会、に対応する。

以上の区分が、今日、革命を考えるうえでその足場をなす諸現実、そして各々が共通の目的にむけて構想する革命の異同をより広い視野で明確にする。もちろん、ここでの分類は十分に現状を把握してはい

ない、ここからすぐ有効な方向と方法が出てくるとは考えないが、考
思の枠組みとしては意味がある。それぞれが固有の問題をもつたろ
う、そうしたところに立って、新しい労働の組織、抑圧を不用とする
人間集団の形成にどう答えていくのか、これが現代の革命に問われて
いる。それぞれの異なる途と、共通の目的がもたらす相互の関わりと
連帯もまた問われている。

アナキズム誌・総目次

リベロ 1〜2号 アナキズム 3〜10号

一号

序文 日本アナキズム研究センター
土方コミュニケーション・もたらう建設 羽熊直行
富士地区一般産業合同労働組合
―その歴史と闘い― 中村隆司
非暴力直接行動・小さな総括 高橋三喜子
非暴力直接行動の訓練 WRIグループ
文献センター・設立と活動の経過 奥沢邦成
山鹿文庫・べらばーなぐるうば 戸駒恒世

二号

山鹿泰治の生涯
外国のアナキストグループ
ブルードン―その現実主義―
(1973・10 150円)
生きるわれらの村へ 弥栄之郷共同体
フランスのアナキストたち1 江口 幹
アナキズム研究センター
センター紹介・今年の活動 センター

三号

石油危機以後とアナキストの仕事 江口 幹
拾頭する地域合同労働組の運動 中河 友
特集・朝鮮人のアナキズム運動
朝鮮人によるアナキズム運動
の過去と現代
韓国の無政府主義運動の状況
韓国のアナキズム運動の現状
宋 世河
リヨン
尾関 弘

ある朝鮮人アナキストの伝記1
是也金宗鎮伝 李乙奎 西京二・訳

フランスのアナキストたち2 江口 幹
情況主義インター・労働者情報通信
アナキスト革命組織 その目的および原理
戦後アナキズム運動史年表2 戸駒恒世
ドイツ労働者評議会運動の起源・下
労働者階級の遅い目覚め(戯曲)
P・イワノフ 石川玄造・訳
(1974・5 250円)

四号

地域合同労働組の可能性を探る 北西地域労研
救援組織の確立に向けて 東京・黒色救援会
子供達と共に―弟へ― 小堀恵美子
衛戍令下の韓国アナキズム運動 尾関 弘
ある朝鮮人アナキストの伝記2 李 乙奎
論潮 教育ノート1 北川鬼太郎
メモ・日本の政治状況 江口 幹
書評「性とアナキズム」 中村隆司
世界語・エスペラント1 江藤敏和
外国のアナキストグループ 橋本義春
「フリーダム」の過去と現代 橋本義春
日本の革命的アナキスト同志へ K・ノブ
中南米紀行 山本安屯
戦後アナキズム運動史年表3 同研究会
昔風の恋歌―アナキズムについて―
P・グッドマン 片桐ユズル・訳

進行する差別・分断支配と対決する
労働者運動を
全国連合への批判的提言
資料 日本に於けるアナキズム運動の
可能性と我々の基本方針(全関西9
・16集会実行委) アナキスト陣営
内の共働と連帯について (橋本義春)
特集・自治管理・労働者評議会
自治管理への問いかけ 安田信治
評議会社会主義について 江口 幹
自治管理と新社会 A・メエテル
論潮 七ヶ選挙から読みとること 南島二郎
反選挙に関する走り書き 宮坂英一
教育ノート2 北川鬼太郎
世界語・エスペラント2 江藤敏和
早大図書館占拠闘争の軌跡 編集部
外国のアナキストグループ チュティン
情状主義者インター批判史 ユー・ハン
香港・七〇年代戦線 同研究会
戦後アナキズム運動史年表4
クロンシュタット・イズヴエスチャ1
吉原文明・訳
(1974・11 350円)

六号

地方自治体論・覚え書き 野本三吉
住民運動の新しい質
―旧料金で電気料を払う会― 横倉辰次
特集・コミュニケーションの再検討
コミュニケーションへの期待 江口 幹
キブツのこと バレスチナのこと 広河隆一
論潮 教育ノート3 北川鬼太郎
全国連合について・補遺 編集部
書評「無政府共産党」 藤川健郎
書評「黒いバリ」 南島二郎
映画評「宵待草」 山上春彦
エスペラントの理想主義 江藤敏和
職場からの挨拶(投稿) 村井 乱
戦後アナキズム運動史年表5 同研究会
アナキズム運動史への視座 中村隆司
ある朝鮮人アナキストの伝記3 李 乙奎
クロンシュタット・イズヴエスチャ2
(1975・2 350円)

七号

自治権奪還の里程 南島二郎
地域合同労働組運動の形成を 中河 友
特集・組織論の変革をめぐる 石川玄造
組織にこめられた革命的性 西田弘和
没落と再生現代左翼運動の病相
B・Bと組織をめぐる断相 蓮台寺晋

アナキストと自主管理 — 冬川啓夫・訳編
「オート・ジュエスチオン」誌特集より
論潮 「アンテロガシオン」誌の事 江口幹
教育ノート4 北川鬼太郎
書評「アナキスト」 宮坂英一
映画評「宵待草」 山上春彦
核抗議船フリー号の意義 戸駒恒世
クロンシュタット・イズヴェスチャ3
潮流 (1975・5 350円)

八号

ボクラのものを ボクラの手に
— 良心的軍事費拒否の会 — オーノミチオ
アナキズムとテロリズム 江口 幹
特集・天皇制の解体とは アキツミカミ・ノート
大沢正道
アナキストと天皇制破壊 大島英三郎
辻 文明
諸悪の根源たる殺人狂を裁け 松井不朽
何が本質か 奥崎謙三
天皇制とわれわれのあいだ 座談会
キブツ給水塔の黒旗・キブツとアナキズム
ジョラ・メノール 冬川啓夫・訳
ある朝鮮人アナキストの伝記4 李 乙奎
クロンシュタット・イズヴェスチャ4
現代社会福祉の状況 遠矢 巖
論潮 ベトナム革命の素顔 石川玄造
映画評「わが青春のとき」 山上春彦

書評「遊戯と労働の弁証法」 林光晴
状況、そして立場 奥沢邦成
SIC通信 国際通信部
潮流／編集方針にむけて (1975・9 350円)

九号

南埼玉病院の闘争報告 関美保子
特集・暴力VS非暴力
狼の立場と僕たちの立場 安保拒否百人委
— 救援の問題をめぐる — 河辺岸三
非暴力の理念と「摂理の暴力」 福島亀吉
内ゲバを超えるものは：：： 森 一蘭
戦争抵抗者インタビの今日的課題 宮坂英一
暴力主義の系譜とその批判 奥沢邦成
ある朝鮮人アナキストの伝記・完 李 乙
書評「青鞥の女たち」 藤川健郎
映画評「七人の侍」 山上春彦
学童保育の現場から 石垣鉄兵
第四回全国労組活動交流集会 中河友
(1975・12 350円)

十号

便利さに 未来も捨てる 使い捨て 樋田功
盗毒の視点 大門一樹
特集・新しい労働運動をめざして 中河 友
反帝労働運動と「労活」

企業内組合主義の批判としての
地域合同労組 中村隆司
反戦派労働運動から受け継ぐもの 奥沢邦成
新しい組織形態としての評議会 江口 幹
論潮 物価高の生活危機は世界の危機
そのものではないのか 木村 宏
三里塚の位置 安田信次
労働組合は革命の起爆剤
となり得るか 横倉辰次
書評「虚無思想研究」 森 一蘭
映画評「変奏曲」 山上春彦
東アジア反日武装戦線と非暴力直接行動
の立場 (投稿)

クロンシュタット・イズヴェスチャ5
潮流／暴力再考 (合評会報告)／読者のこえ
(1976・3 350円)

(五二頁よりつづく)
ともあれ、深作の力量をもってすれば、「実録日共」は相当に面白い作品になると期待しているのだが(何しろ、現代日本の最もすぐれた組織形成者は、一人は田岡一雄であり、もう一人が宮本顕治だという説すらあるのだから)、これはこの作品の評としては蛇足にすぎないだろうか。(東映作品)

クロンシュタット・イズヴェスチャ

10号 一九二二年三月十二日 土曜日
11号 一九二二年三月十三日

La Commune de
Cronstadt
—Cronstadt
Izvestias—
Delibaste 1969
吉原文明・訳

イズヴェスチャ 10号

一九二二年 三月十二日 土曜日

本日は独裁政治崩壊と官僚機構瓦解の前日である。

臨時革命委員会は荷物輸送に関し、その重量と用途を特記し、家畜および自動車輸送機関の正確な目録を三月十三日までに臨時革命委員会の運輸課に提出するよう、海軍所管とソヴェト機関、並びにクロンシュタット要塞のすべての軍事部門に対し要請する。

臨時革命委員会運輸所管代理 バイコフ

戦況報告

濃霧が発生し発砲が妨害されたので、三月十一日は日中平閑であつ

た。十八時に「クラスナイア・ゴルカ要塞」の砲門から発砲された。だが町には的中せず効力はなかった。我々の要塞の北側——リシーとセストロレック——要塞は、引き続き砲撃を続けている。我々の砲兵中隊の砲火は、敵を静まらせた。斥候パトロール隊が派遣された。

我々の砲兵中隊はオラニエムバンに於いて、パンを万載した列車を破壊した。その結果、オラニエムバン要塞の守備兵は、その日パンの配給がなかった。敵の飛行機は町に幾度となく侵入し多くの爆弾を投下した。

十六時に敵の砲隊がオラニエムバンの方向から、続いて「クロスノオフロツキー」要塞からの砲門が開かれた。我々の大砲は力強く反撃した。二〇時に発砲は静まった。

臨時革命委員会委員長・ベトリチェンコ
クロンシュタット要塞守備隊々長 ソロヴィイマノフ